

公衆衛生学

1 構成員

	平成15年3月31日現在
教授	1人
助教授	1人
講師（うち病院籍）	0人（0人）
助手（うち病院籍）	1人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（0人）
研究生	3人
外国人客員研究員	1人
技官（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	1人
合 計	8人

2 教官の異動状況

- 竹内 宏一（教授）（H1. 7. 1～現職）
 金森 雅夫（助教授）（H9. 4. 1～H15. 3. 31）
 甲田 勝康（助手）（H7. 4. 1～H15. 1. 31）
 中村 晴信（助手）（H11. 11. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成14年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	5編（0編）
そのインパクトファクターの合計	6.04
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	1編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	1編（1編）
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4) 著書数（うち邦文のもの）	1編（1編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	1編（1編）
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Nakamura H, Kouda K, Fan WY, Takeuchi H: Cardiovascular risk factors in a tourist town:

association with job-related factors. J Physiol Anthropol Appl Human Sci 21: 223-227, 2002.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Kataoka H, Tanaka M, Kanamori M, Yoshii S, Ihara M, Wang YJ, Song JP, Li ZY, Arai H, Otsuki Y, Kobayashi T, Konno H, Hanai H, Sugimura H. : Expression profile of EFNB1, EFNB2, two ligands of EPHB2 in human gastric cancer. J Cancer Res Clin Oncol 128 (7): 343-8, 2002.
2. Suzuki M, Ohyama N, Yamada K, Kanamori M: The relationship between fear of falling, activities of daily living and quality of life among elderly individuals. Nurs Health Sci 4 (4): 155-61, 2002.

インパクトファクターの小計 [2.19]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Wang Y, Ota S, Kataoka H, Kanamori M, Li Z, Band H, Tanaka M, Sugimura H: Negative regulation of EphA2 receptor by Cbl. Biochem Biophys Res Commun 296 (1): 214-20, 2002.
2. Nakamura T, Hirai R, Kitagawa M, Takehira Y, Yamada M, Tamakoshi K, Kobayashi Y, Nakamura H, Kanamori M: Treatment of common bile duct obstruction by pancreatic cancer using various stents: single-center experience. Cardiovasc Intervent Radiol 25 (5): 373-80, 2002.

インパクトファクターの小計 [3.85]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Takeuchi H, Kouda K, Nakamura H: Nursing, Yogo, and School Diagnosis. Jpn J School Health 43 (suppl): 6-7, 2002.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 吉田隆子：味覚を育てる。子どもと健康 72：14-21, 2003.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 竹内宏一他949名：看護大事典，医学書院，全3,166頁，2002.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 岡本祥成，金田ゆり江，竹内宏一：センチナリアン（100歳長寿者）における健康長寿因子の記述学的研究 平成13年度 第8回「地域保健福祉研究助成」・第10回「ボランティア活動助成」報告集 56-60，2002.

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成14年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成14年度
(1) 文部科学省科学研究費	3件（990万円）
(2) 厚生科学研究費	0件（万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件（万円）
(4) 財団助成金	1件（25万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件（万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	2件（40万円）

(1) 文部科学省科学研究費

金森雅夫（分担者）創成的基盤研究費（新プログラム方式）「糖尿病の遺伝素因の総合的解析」
800万円（継続） 代表者 千葉大学大学院医学研究科教授 清野 進

金森雅夫（代表者）基盤研究（C）(2)「障害者に対する音楽療法の神経行動・内分泌学的評価手法に関する研究」70万円（継続）

中村晴信（代表者）基盤研究（C）(2)「アレルギー性皮膚炎の組織酸化的障害における食事制限の抑制機序」120万円（継続）

(4) 財団助成金

甲田勝康（代表者）財団法人静岡総合研究機構学術教育研究推進事業費補助金「小学生における心血管疾患の危険因子：静岡県内の動向」25万円（新規）

6 特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	0件	4件
(4) 学会開催回数	0件	1件
(5) 学会役員等回数	0件	18件
(6) 一般演題発表数	0件	

(1) 会議等開催・参加：

(2) 国内学会の開催・参加

2) シンポジウム発表

甲田勝康 絶食及び食事制限の基礎 第2回日本統合医療学会 2002年5月，京都

3) 座長をした学会名

竹内宏一 第9回浜松東洋医学研究会 2002年9月，浜松

竹内宏一 第45回東海学校保健学会 2002年10月，愛知

竹内宏一 第73回日本衛生学会 2003年3月，大分

甲田勝康 第44回日本生理人類学会 2002年11月，東京

4) 主催する学会名

第9回浜松東洋医学研究会 2002年9月，浜松

5) 役職についている学会名とその役割

- 竹内宏一 日本学校保健学会理事
- 竹内宏一 日本公衆衛生学会評議員
- 竹内宏一 日本衛生学会評議員
- 竹内宏一 日本民族衛生学会評議員
- 竹内宏一 日本産業衛生学会評議員
- 竹内宏一 日本健康教育学会評議員
- 竹内宏一 日本産業精神保健学会評議員
- 竹内宏一 東海公衆衛生学会評議員
- 竹内宏一 産業衛生学会東海地方会理事
- 竹内宏一 東海学校保健学会理事
- 竹内宏一 日本代替・相補・伝統医療連合学会評議員
- 竹内宏一 日本体力医学会評議員
- 金森雅夫 日本衛生学会評議員
- 金森雅夫 日本疫学会評議員
- 金森雅夫 東海学校保健学会評議員
- 甲田勝康 日本生理人類学会評議員
- 甲田勝康 日本衛生学会評議員
- 甲田勝康 東海学校保健学会評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は入れない）	2件	0件

(1) 国内の英文雑誌の編集：

甲田勝康 J Physiol Anthropol Appl Human Sci（日本生理人類学会）， a member of Editors PubMed/Medline登録あり，インパクトファクター無。

中村晴信 J Physiol Anthropol Appl Human Sci（日本生理人類学会）， a member of Editors PubMed/Medline登録あり，インパクトファクター無。

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

甲田勝康 J Physiol Anthropol Appl Human Sci（日本）2回

中村晴信 J Physiol Anthropol Appl Human Sci（日本）2回

9 共同研究の実施状況

	平成14年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	2件
(3) 学内共同研究	0件

(2) 国内共同研究

甲田勝康（関西医科大学）食事制限と肝機能に関する研究

中村晴信（関西医科大学）食事制限と疾病予防に関する研究

10 産学共同研究

	平成14年度
産学共同研究	0件

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 学校保健学と自然医学・伝統医学の関係をめぐる考察

学校保健にとって、自然医学・伝統医学はつぎの点において意義がある。

まず、自然医学・伝統医学は、自然治癒力あるいは自然良能力・人体の正常化作用を重視していることである。自然治癒力とは現代西洋医学の概念ではなく東洋思想に根ざした考え方で、単に生体内のみならず広く生体を取りまく環境との関係を重視しているところにも特徴がある。

学校保健が対象とする発育途上の子どもにとって、人工的な医薬に頼ることなく自然治癒力を自身で体験することは、疾病のみならず他の困難に遭遇したときに大きな力となる。つまり、他に頼ろうとする依存的な生き方から内在する生きる力を信じた自立的な生活へと変革する鍵となる。

さらに、近代西洋医療のようにおどろおどろしい医療器械に身をさらされることなく、自分の廻りの自然のなかに、自分を癒してくれる多くの存在を知ることは、子どもの心を安らかにかつ豊かにして、自然との共生へとはぐくんでくれる。

他に、学校保健は、学校給食や食事教育さらに学校体育、環境教育、消費者健康教育とも密接な関係があり、それらを改善して行くうえでも自然・伝統医学は貴重な示唆を得ることができる。

（竹内宏一，甲田勝康，中村晴信）

2. 主要産業の異なる地域と心血管疾患のリスクファクター

主要産業が農業，漁業，もしくは観光産業と，各々異なる3つの町（人口規模は10000人から18000人）において，心血管疾患のリスクファクターや，健康状態，生活様式について比較した。対象者は各町の基本健康診断受診者とした。その結果，観光産業が主要産業となっている町においては，農業や漁業の町にくらべて，健康診断の受診率が低く，また，肥満，高血圧，あるいは動脈硬化指数の高い者が多く見られた。観光産業の町では，特に自営業に携わっている女性は雇用されている女性よりも，高血圧であるものや不規則な生活習慣であるものが多く見られた。

（甲田勝康，中村晴信，范文英，竹内宏一）

3. 接触性皮膚炎におよぼす絶食の影響

マウスに24時間の絶食を行い，アレルギー性皮膚炎におよぼす影響について検討した。自由摂取させた群と，24時間絶食させた群の両群に，dinitrofluorobenzen (DNFB) 塗布によりアレルギー

性接触性皮膚炎を耳介に発症させた。24時間絶食群は自由摂取群に比べ、耳介の厚み、およびその耳介組織の炎症像ともに、抑制されていた。また、酸化ストレスの指標として8-hydroxydeoxyguanosineを用いた免疫組織学的検討においても、絶食による抑制所見がみられた。このことより、アレルギー皮膚炎の炎症下における絶食の酸化的障害抑制作用の大部分は、絶食による炎症抑制作用の結果であることが示唆された。

(中村晴信, 甲田勝康, 竹内宏一)

4. 肝細胞機能におよぼす絶食の影響

ラットに48時間の絶食を行い、肝細胞機能におよぼす影響について検討した。自由摂取させた群と、48時間絶食させた群に対し、^{99m}Tc-galactosyl human serum albuminによる血中クリアランス測定による肝細胞機能評価を行った。その結果、肝細胞に存在するアシアロ糖蛋白受容体が持つ糖蛋白の取り込み機構に、48時間絶食は著名な影響をおよぼさないことが示された。

(甲田勝康, 中村晴信, 竹内宏一)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

1. アレルギー性疾患の予防における食事制限の影響

げっ歯類等の動物実験において、30%-40%程度の食事制限により、寿命延長効果や、悪性腫瘍等の慢性疾患の発症や症状の進展抑制効果がみられることは既によく知られている。一方、アレルギー疾患に対する食事制限については、アレルゲンの除去という観点から、アレルギーの原因となる食物を除去することについて研究が展開されてきた。これに対し我々の研究は、全栄養成分を対象に食事の全体量を制限することにより、アレルギー疾患の予防を試みるものである。このテーマについては、現在、関西医科大学衛生学教室と共同研究を展開しているが、このテーマに関して他に研究しているグループはなく、内容は我々独自のものである。当該研究は、アレルギー性疾患の予防に、生活習慣のひとつである食事を要因として持ち込み、今後の関連した研究領域を広く展開しうるための方向づけとして、また先駆的研究としての位置付けとしての意義がある。

(中村晴信, 甲田勝康, 竹内宏一)

15 新聞、雑誌等による報道